

論文概要

地方居住のエジプト人女性が手工芸品制作によって得た機会とその意義

-Red Sea 県の事例から-

学籍番号：22MD0145

氏名：田原 彩

研究の目的と方法

本論文の目的は、次の3つである。第一に、語られることの少なかったエジプト人女性一人ひとりがもつ多様な考えや生き方、その背景の一端を明らかにすること。第二に、手工芸品の職業訓練や手工芸品制作が女性達に与える多面的な効果を明らかにすること。第三に、女性達にとって手工芸がどのような意味をもつのかを捉え、それを踏まえた職業訓練のあるべき姿を検討することである。これら3つの目的のもとで、開発途上国において、女性の社会進出や収入向上の手段として用いられることの多かった手工芸の意義とそこに携わる女性をエジプトの文脈で考察し、その効果を明らかにすることを目指してきた。

エジプト政府はこれまで、高い失業率やジェンダー格差の解消、女性のエンパワメントを目的に様々な省庁や機関で手工芸品制作の技術的な職業訓練やビジネス開発プロセスのサポートの実施を推奨してきた。しかし女性たちが最後まで修了しないケースが目立った。筆者は JICA 海外協力隊の手工芸隊員として職業訓練や NGO で従事した経験を通じ、エジプト政府によるこれらの事業が、女性の経済的、教育的格差やジェンダー役割等を考慮せず実施している点に問題意識を抱き、地域の特色を考慮した柔軟でニーズに合った政策施行の必要性を感じてきた。

加えて、学術研究においても、調査対象であるエジプトや中東において、女性に関連した民族誌は多いものの、そこで描かれる女性たちは、「アラブ女性」、「イスラーム教徒」、「貧困層」、「部族社会の女性」など (Nelson, C. (1974). *Public and private politics: women in the Middle Eastern world*. 1. *American ethnologist*, 1(3), 551-563. や S.A.Morsy, Badran, Margot, *Feminists, Islam, and Nation: Gender and the Making of Modern Egypt*, New Jersey: Princeton University Press, 1995.) 特定のイメージのもとに描かれている印象がある。

開発支援や先行研究では、女性が手工芸品の制作を通じて社会参画することは、経済的、文化的、社会的に意義があると認識されている。よって、具体的な事例に着目することで、手工芸品制作に携わる女性達が多様な、あるいは限られた選択肢の中で意思決定するプロセスの実態の一端を明らかにし、女性たちにとって手工芸制作がどのような機会となっているかを広い視点で捉えることに意義があると考えた。加えて先行研究によると「手芸」は、たんに女性による暇つぶしの仕事として軽視されがちであり、美術や工芸との境も曖昧でその概念の形成には至っていないという。この点からも、女性たちの事例を「手芸の概念」を創出する素材とし、エジプトの女性たちにとって手芸とはどういったものなのかを示すことに意義があると捉えた。

以上の背景から、本論文では、手工芸制作の職業訓練に参加及び手工芸品制作を行う地方在住の女性に焦点を当て、その実態を明らかにすることを目指した。

研究の方法には、文献調査と現地調査を用いた。

文献調査では、第一にエジプト人女性の社会的位置づけとジェンダー課題を整理した。第二に女性の就業状況とその課題、施行されている政策を整理した。第三に、エジプトで実施されている手工芸に関わる政策、手工芸分野が求める女性たちの役割、その課題を整理した。

現地調査では、Red Sea 県で半構造化インタビューと参与観察を行い、手工芸分野に携わるエジプト人女性が、複数の選択肢の中で、どういったプロセスで、何を選び取ったのか、どのような効果があったのかを調査した。

対象者は、Red Sea 県で実施された職業訓練参加者及び手工芸分野に携わる女性とし、女性たち同士の関係性や、女性たち自身の生活、考え方、また職業訓練の受講や手工芸品の販売等を通して経た変化を知ることによって女性たちの実態に迫った。

質的データの考察には、二つの手法の組み合わせによって分析していく方法を採用した。最初に、M-GTA の手法を参考に語りからキーワードを抽出した。次にそのキーワードを先行研究から援用した概念図を手掛かりとして用い分析を行った。

論文の構成

第1章 はじめに

1-1 研究の背景と問題の所在

1-2 研究の目的

1-3 研究の方法

1-4 論文の構成

第2章 エジプト人女性の社会的位置づけと就労

2-1 エジプト人女性のジェンダー役割と開発

2-2 エジプトのジェンダー課題

2-3 女性のエンパワメントを推進する機関や政策

2-4 統計からみる女性の就労状況とその課題

2-5 本論文における問題意識に基づいた分析視点の設定

第3章 エジプトにおける手工芸分野と職業訓練の位置付け

3-1 エジプトの手工芸品とその課題

3-2 社会連帯省が行う手工芸分野の職業訓練

3-3 非政府機関が行う手工芸分野の職業訓練

3-4 小括

第4章 事例対象地である Red Sea 県の概況

4-1 Red Sea 県の地理的概況

4-2 Red Sea 県の女性の就労状況

4-3 Red Sea 県における女性のエンパワメントを推進する機関

第5章 Red Sea 県における手工芸分野の支援

5-1 手工芸分野を支援する Red Sea 県の機関

5-2 社会連帯省を始めとする政府機関が実施する職業訓練

5-3 職業訓練後のサポート

5-4 手工芸品分野を支援する Red Sea 県の NGO

第6章 Red Sea 県在住女性の事例研究

6-1 手工芸に携わる女性-Red Sea 県 Hurghada-

6-2 手工芸に携わる女性-Red Sea 県 Marsa Alam-

第7章 全体考察

7-1 事例研究から導き出された女性の多様性とその背景の考察

7-2 職業訓練のあるべき姿

第8章 結論

8-1 手工芸に携わる女性の実態と職業訓練の効果

8-2 残された課題と展望

表一覧

図一覧

参考文献一覧

謝辞

論文の概要

本論は8つの章から構成される。

第1章では、本論文の概要として、研究の背景とその目的、及び研究方法を述べた。

第2章では、エジプトでのジェンダー役割と就労の情報を報告書、公的情報及び先行研究から検討し、現在のエジプト政府が行う就労支援策や、様々な機関によって捉えられている女性達のジェンダー役割を整理した。第一に、エジプトでは伝統的な性別役割の規範が特に地方では残っていることが分かった。一方で都市部を中心に従来の働き方や結婚観に変化があることも示された。また、女性の就業先として好まれてきた公務員での働き口の少なさ、インフォーマルセクターで働く女性たちの状況を示した。

これらの現状を踏まえ、本論文における事例分析の視点として、女性の語りを M-GTA 等の質的なデータ分析方法を参考にして分類したうえで、分類した語りを、主な先行研究で示された「手芸的なもの」(上羽陽子・山崎明子・他(2020)『現代手芸考:ものづくりの意味を問い直す』フィルムアート社)の概念図にある6つの視点「つくる」「教える」「仕分ける」「稼ぐ」「飾る」「つながる」を用いて考察する枠組みを設定した。この手順をとることで、先行研究の議論を踏まえつつも現地の女性にとって手工芸とは何かを分析していった。

第3章では、第2章で整理した手工芸分野がもたらす効果を念頭に置き、エジプトの手工芸分野の状況を整理した。社会連帯省を始めとした多くの政府機関及び NGO によって職業訓練が実施されてきたことを述べた。

第4章では、事例調査地である Red Sea 県において、政府機関、国際機関共に女性のエンパワメントが推進されていることを示した。加えて、首都 Cairo と就労状況を比較し、Red Sea 県では公務員の割合が多いこと、それ以外の働き口の少なさが示された。

第5章では、Red Sea 県における手工芸品制作支援の概要、手工芸品制作を通じた職業訓練の実施状況、その実施機関である手芸センター、NGO を整理した。職業訓練後のサポートとしてバザーや販売先の重要性や実施状況を示したが、社会連帯省管轄の販売店舗は機能していない実態が分かった。

第6章では、Red Sea 県 Hurghada と Marsa Alam で実施した、職業訓練参加者及び手工芸品制作に携わる女性達への半構造化インタビュー及び参与観察の結果を整理した。語りから、同じ Red Sea 県であっても、女性たちが手工芸に向き合う姿は、個人によっても異なることが示された。特に Hurghada では、以前は消極的だった販売への期待、Marsa Alam では手工芸が好きではないが仕事をしている女性の語りが特徴的であった。

第7章では、第6章で示した女性達の語りを使い、第2章で設定した分析の枠組みに基づき、女性たちの職業訓練への参加動機や手工芸制作の効果の多様さを考察し、エジプト Red Sea 県における「手芸的なもの」を捉える視点の創出を行った。加えて、第4章までに述べてきた女性像、職業訓練の効果と実際の語りより示された女性の実態を整理し、今後の職業訓練を実施する上で考慮すべき点を考察した。具体的には、以下の通りである。

分析枠組みの6つの視点「教える」からは、女性たちの新しい学びを求める姿勢から技術的な向上や商品の完成を高めることよりも、常に新しいことを学ぶことで自分の価値や自己肯定感を求めていることが伺えた。

「つくる」からは、つくることが生活の一部であることが示された。一方でインターネット等による新しい価値観の流入を理由に作られなくなる事例から、エジプトの伝統的な手工芸制作に携わる女性たちが、現在直面している状況の一端を示すことができた。

「仕分ける」からは、女性の余暇的活動と捉われてきたが手芸が、実際には、目的によって従事者にとっての楽しみの有無など意味も異なり、多様な側面があることが示された。

「稼ぐ」では、「稼ぐ」に至るまでを3つの段階に整理し、Hurghada の女性たちは、自分たち自身で稼ぐ方法を模索し選択できるが、Marsa Alam の女性たちは、販売環境にいるものの決まった手工芸品販売以外の選択肢はなく、限られた環境の中で稼ぐか稼がないの選択がされていることを考察した。

「飾る」では、作ったものは家で使う様子がみられ、開発の文脈では、職業訓練で学んだ技術を生かし家庭を飾り、女性たちの生活が彩られることが語られる例は少なかったが、実際の女性たちの生活を潤す効果も、もたらしていることが特徴づけられた。

「つながる」では、「手芸センター」に学びや他者との交流、つながりを求めて集まっていた女性たちの変化が示された。誰もがスマートフォンで気軽にインターネットにアクセスできることから、物理的に集まらなくてもできる YouTube 動画による学び等の普及が進んだことや、インターネットを介した関係が、新しい「つながる」の形であることを考察した。

加えて、6つの分析視点に配置できなかった語りの分類を2つのカテゴリーに整理し、エジプト Red Sea 県における「手芸的なもの」を捉える視点として分析視点に加えた。1つ目が「力になりたい(助けが必要な誰か)」「一緒に働いている人のために」、また「稼ぐ」に配置していた「家族のために」の位置を見直し再配置した。2つ目が「外に出る自由」「新しい仕事」「自分自身の変化による社会、人とのかわりの変化」である。視点を加えた点は、エジプトの文脈で「手芸的なもの」を捉える一助となることに有効であると考えられる。

最後に、今後の職業訓練を実施する上で考慮すべき点を考察した。女性たちの一つの技術の向上よりも次々と新しい技術を求めている姿や女性たちに多様なゴールがある点から、市場に合わせた技術向上を目指す教育をすることの難しさが伺えた。またこれまで政府は、外で仕事をしていない女性が職業訓練を通じ稼ぐ手段を身に付け、社会参画することを推奨してきた。しかし、女性たちの日々の生活が忙しく職業訓練に参加することが叶わない語りからは、女性たちの忙しい日常の姿が示された。加えて、女性たちは販売する場所を求めている一方で販売手法を学ぶことも求めている。販売に関するサポートは、店舗運営の難しさが課題であり、女性が自分自身で手軽に販売する手段やそのやり方を提供すべきことが示唆された。

第8章では前章までの議論から本論文の結論を導き、今後の課題について述べた。結論として、手工芸制作に関わる女性たちの背景が様々であったことが導き出され、地域や世代によって異なる学びや、学び方の変化を示した。この点は、今後この地域での女性を対象とした開発援助を行う上で一助となると考えられる。加えて筆者が行ってきた、女性たちの語りを分解しその地域の女性たちが手工芸をどのように捉えているか考察することは、女性たちのニーズや関わりを捉え、検討していく上で有効な手段になる可能性を示せたであろう。

今後の課題として、事例調査地及び調査期間が限られるため、より幅広く語りを集めていく必要があるが、設定した分析視点に基づく考察によって、手工芸制作に関わる女性の参加動機や制作の効果の一部を、エジプトの文脈に沿って特徴づけることができたことが、本論文の成果である。